

あいぶらんど通信

2013年
7月 1日(月)
号外
あいぶらんど運動
推進委員会発行

新発売の

放牧パスちゃん牛乳

って
どこが特別なのでしょう。



今日から、『放牧パスちゃん牛乳』が皆さんのお手元に届きはじめましたね。

今、あいコープから届くチラシは、あっちも牛乳、こっちも牛乳。そんなにすごい牛乳なのでしょうか。6/8に行なわれた新しい牛乳の原乳産地、ながめやま牧場のバスツアーに同行し、あいぶらんど視点で見学してきました。

商品化までの道のり

2003年に、あいコープは『ガイアプラン』を策定しました。これは、放牧牛乳、放牧豚、飼料米、無農薬野菜セット、生ごみの堆肥化、福祉牧場などの課題に取り組むというものです。それぞれ、生産者と協同しながら実現されています。

そして2010年、ながめやま牧場と山形酪農協、奥羽乳業とともに、放牧酪農牛乳の商品化を目指すことを決定したのです。ところが、取り組み始めた直後にあの大震災が起こり、商品化への動きは中断を余儀なくされてしまいました。

その後、復旧が進み放射能の測定体制も整い、商品化を進めることが可能となり、2013年7月、ついに供給開始となりました。

ながめやま牧場の『特別』

放牧

現在、日本の酪農の多くは、牛舎の中で牛を飼育しており、牛本来の姿である『自由に動き回り、生えている草を食む』ことをさせられません。このながめやま牧場にいる牛たちは、180haという、東京ドーム38個分ほどもある牧場で、思い思いの場所でくつろぎながら草を食み、駆け回っていました。



フリーバーン

牧場から牛舎に戻っても、牛たちはつながれることなく自由に動き回れます。1頭ごとのスペースが限られずに、放し飼い方式の牛舎のことをこう呼びます。牛たちは、好きな場所で、好きな体制でリラックスして体を横にする事ができていました。

「放牧畜産実践牧場」認証取得



放牧畜産基準認定制度に基づき、1頭当たりの放牧面積を始めとした厳しい基準をクリアし、2010年に放牧畜産実践牧場の認証を取得しています。

飼料の自給

日本の畜産の飼料自給率は、大変低いのが現状です。このながめやま牧場では、牧草・デントコーンを栽培し、地域の農家と提携して飼料用の稲や麦を作付してもらい、地元のおからやウイスキー粕等も用いて高い割合で飼料を自給しています。

アニマルウェルフェア(動物福祉)

家畜などができるだけ動物本来の生態に近く、快適でいられるようにする考え方です。ながめやま牧場の牛たちは、とにかくゆったり幸せそうで、ストレスフリーで日々を過ごしているようです。



この他にも牛舎で出た糞尿はすべて堆肥となっていて、地域で資源が循環している事もわかりました。

より自然な牛乳を望めば、季節によって乳脂肪分が変化することもありますが、流通させる牛乳には無脂乳固形分 8.0%以上、乳脂肪分 3.0%以上が必要であるという法律があります。法令遵守のためには、牧草のみを与えるのではなく、ある程度飼料を季節ごとに調整しなければなりません。様々な背景を学習しながら、あるべき姿を目指したいと感じました。放牧パスちゃん牛乳があいぶらんど商品になる日も近そうですね。

理事 高野恵美子